



株式会社椿本チエイン

2023年3月期 第2四半期決算説明会

2022年11月18日

[出席者]

5名

代表取締役社長 兼 COO	木村 隆利（以下、木村）
常務執行役員 パワトラ事業統括	永井 康詞（以下、永井）
上席執行役員 マテハン事業統括	岡本 雅文（以下、岡本）
上席執行役員 モビリティ事業統括	佐藤 功（以下、佐藤）
執行役員 財務・経営企画・情報システム・新事業開発担当	明坂 泰宏（以下、明坂）

株式会社椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算報告

<アジェンダ>

説明内容	説明者	予定時間
・2023年3月期 第2四半期決算報告 ・トピックス	代表取締役社長 木村 隆利	35分
・質疑応答	社長、各事業統括、 財務担当役員	25分

2022年11月18日

木村：皆さん、こんにちは。椿本チエインの木村でございます。私は本年度より、当社の社長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

1. 23年3月期2Qレビュー- 連結決算ハイライト

3

- チェーン事業の好調、円安による為替換算増加により増収増益。ただし、原材料や部品価格の高騰等により、営業利益率は低下。

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期	前年同期比	予想比 (5月11日公表)	
	第2Q実績	第2Q実績	増減率	予想値	増減率
売上高	102,518	118,933	16.0%	117,000	1.7%
営業利益	8,185	8,375	2.3%	8,600	-2.6%
営業利益率	8.0%	7.0%		7.4%	
経常利益	9,156	9,889	8.0%	9,200	7.5%
親会社株主に帰属する 四半期純利益	6,624	6,756	2.0%	6,800	-0.6%
1株当たり四半期純利益	178.96円	182.49円		183.69円	-
(為替レート 1USD)	109.81円	134.04円		120.00円	-
(為替レート 1EUR)	130.88円	138.77円		135.00円	-
(為替レート 1RMB)	16.66円	18.96円		18.90円	-



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

木村：ただいまより、2023年3月期第2四半期連結業績報告を行います。

2023年3月期第2四半期累計の業績は、チェーン事業の好調、円安効果により、増収増益となりました。一方、5月11日公表の予想に対しては、売上高が1.7%上回ったものの、営業利益、親会社株主に帰属する四半期純利益が若干の未達に終わりました。

売上高は、為替が円安に進行したため、為替による影響額は、約97億円のプラスの効果となりました。営業利益は、為替の影響が約5億円のプラス効果であったことからいきますと、実質は、3.6%の減益となっております。

2. 23年3月期2Q比¹- 事業セグメント別業績

4

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期	前年同期比	予想比 (5月11日公表)	
		第2Q実績	第2Q実績	増減率	予想値	増減率
チェーン	売上高 ^{※1}	35,348	43,609	23.4%	38,000	14.8%
	営業利益	5,142	6,285	22.2%	5,400	16.4%
	営業利益率	14.5%	14.4%		14.2%	
モーション コントロール	売上高 ^{※1}	9,539	10,886	14.1%	11,000	▲ 1.0%
	営業利益	426	745	74.5%	700	6.4%
	営業利益率	4.5%	6.8%		6.4%	
モビリティ	売上高 ^{※1}	32,420	36,429	12.4%	38,000	▲ 4.1%
	営業利益	3,648	2,375	▲ 34.9%	3,200	▲ 25.8%
	営業利益率	11.3%	6.5%		8.4%	
マテハン	売上高 ^{※1}	25,334	28,066	10.8%	30,000	▲ 6.4%
	営業利益	▲ 221	▲ 74	—	300	—
	営業利益率	—	—		1.0%	
その他 ^{※2}	売上高 ^{※1}	1,338	1,477	10.4%	1,000	47.7%
	営業利益	▲ 222	▲ 265	—	▲ 300	—
	営業利益率	—	—		—	

※1：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

※2：「その他」は、報告セグメントではありません。



株式会社 橋本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

事業セグメント別の業績です。詳細は後ほどご説明いたしますので、ここでは金額と為替の影響のみ、簡単にご紹介いたします。

チェーン事業は、増収増益に終わりました。チェーン事業での為替の影響額は、売上高で約40億円、営業利益で約5億円、いずれもプラスの効果になっております。

モーションコントロール事業は、同じく増収増益。そして、為替影響額は、売上高で約5億円、営業利益で約4,000万円、それぞれプラスの効果となっています。

モビリティ事業は、増収になりましたが、残念ながら減益となりました。ここでの為替の影響額は、売上高で約36億円のプラス、営業利益は約1,000万円のマイナスとなっております。

マテハン事業につきましては、27億円の増収、そして収益改善となりました。為替の影響額は、売上高で約17億円のプラス、営業利益では約9,000万円のマイナスとなりました。

3. 23年3月期2Q比¹⁾- 所在地別業績

5

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期	前年同期比
		第2Q実績	第2Q実績	増減率
米 州	売上高 ^{※注}	27,778	37,731	35.8%
	営業利益	1,555	1,535	▲ 1.3%
	営業利益率	5.6%	4.1%	
欧 州	売上高 ^{※注}	11,904	14,699	23.5%
	営業利益	545	644	18.0%
	営業利益率	4.6%	4.4%	
環インド洋	売上高 ^{※注}	8,329	9,678	16.2%
	営業利益	1,201	1,143	▲ 4.8%
	営業利益率	14.4%	11.8%	
中 国	売上高 ^{※注}	9,693	10,619	9.6%
	営業利益	641	599	▲ 6.5%
	営業利益率	6.6%	5.6%	
韓国・台湾	売上高 ^{※注}	5,147	5,362	4.2%
	営業利益	219	184	▲ 16.3%
	営業利益率	4.3%	3.4%	
日 本	売上高 ^{※注}	56,402	58,723	4.1%
	営業利益	3,796	3,629	▲ 4.4%
	営業利益率	6.7%	6.2%	

※注：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

<主な実績レート>

(単位：円)

	USD	EUR	CAD	AUD	THB	TWD	RMB	KRW	MXN
22/3上期	109.81	130.88	88.30	82.61	3.50	3.92	16.66	0.10	5.34
23/3上期	134.04	138.77	103.85	93.60	3.65	4.47	18.96	0.10	6.08

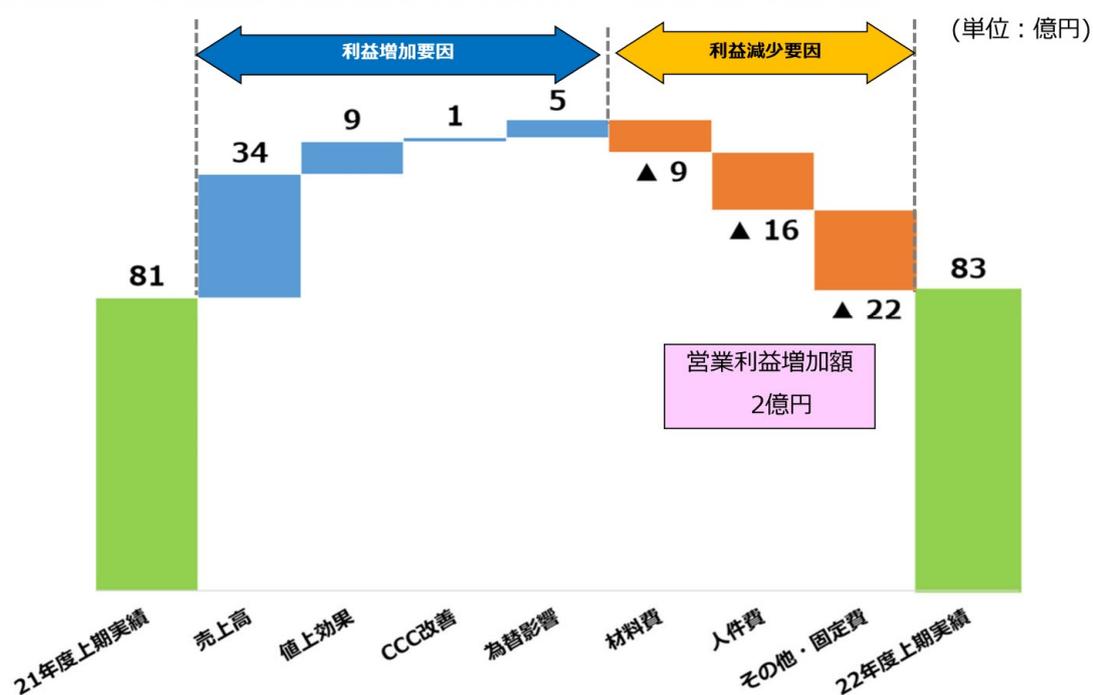


株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

所在地別の業績は記載のとおりです。詳しい説明は割愛いたします。

4. 23年3月期2Q比¹⁾ 連結営業利益増減要因分析 6

■ 2022年3月期上期実績 vs 2023年3月期上期実績



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

営業利益の増減要因分析です。

まず、増加要因といたしましては、売上高の増加に伴う営業利益の増加が約 34 億円、値上げの効果による増加が約 9 億円、セントラル・コンベヤ社の損益改善により約 1 億円、そして為替の影響により、約 5 億円プラスとなりました。

一方、営業利益の減少要因は、材料費の増加によるものが約 9 億円、人件費の増加によるものが約 16 億円、その他・固定費の増加により約 22 億円の減少となりました。詳細は後ほど、セグメント別にご説明いたします。

5. 23年3月期2Q比¹- 事業セグメント別業績

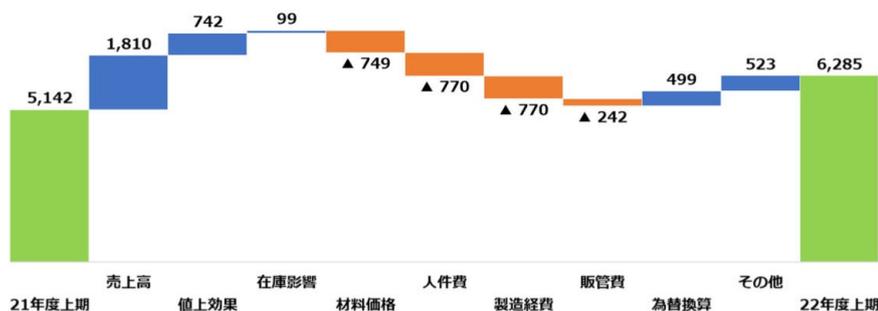
〈チェーン〉 7

※注1：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期	前年同期比	業績予想比	
		第2Q実績	第2Q実績	増減率	予想値(5/11)	増減率
チェーン	売上高 ^{※注1}	35,348	43,609	23.4%	38,000	14.8%
	営業利益	5,142	6,285	22.2%	5,400	16.4%
	営業利益率	14.5%	14.4%		14.2%	

〈営業利益の増減要因〉



〈前年同期比〉

- ・日本、米州、欧州、環インド洋における需要好調により増収・増益。

〈5/11公表予想比〉

- ・日本および米国での販売好調により増収。コスト削減にも引き続き注力した結果、増益。



株式会社 橋本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

それでは、事業別の概要です。

チェーン事業は、売上高が436億円、営業利益は62億円となりました。前年同期比でも82億円の増収、11億円の増益となりました。また、本年5月の予想に対しても、売上高でプラスの14.8%、営業利益でプラスの16.4%と、大幅に上振れした形となりました。

チェーン事業部では、国内向け、海外向けとも好調。また、グローバルでも、米州、欧州、環インド洋でも、依然、販売の好調を維持しております。利益面では、各地とも、原材料高や生産増に伴う人件費の増加など、コストは上昇していますが、増益の結果となりました。

営業利益の増減要因ですが、材料価格の上昇で約7.4億円、人件費の増加で約7.7億円、製造経費の増加で約7.7億円の利益の減少要因があるものの、売上高の増加により、約18.1億円、値上げの効果により約7.4億円などにより、営業利益は、前年同期比22.2%増の62億円となりました。

5. 23年3月期2Q比¹⁾- 事業セグメント別業績

〈MC〉

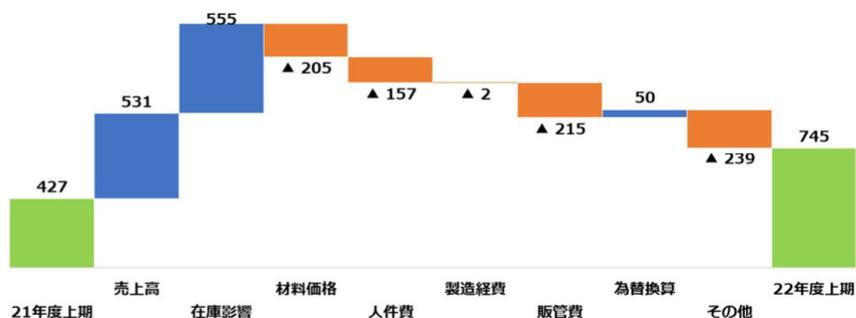
8

※注1：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期	前年同期比	業績予想比	
		第2Q実績	第2Q実績	増減率	予想値 (5/11)	増減率
モーショ ンコント ロール	売上高 ^{※注1}	9,539	10,886	14.1%	11,000	▲1.0%
	営業利益	426	745	74.5%	700	6.4%
	営業利益率	4.5%	6.8%		6.4%	

〈営業利益の増減要因〉



〈前年同期比〉

- ・韓国・台湾をのぞくすべての地域において、増収・増益。

〈5/11公表予想比〉

- ・特に日本で部品調達に苦慮し、売上高未達も、利益は確保。



株式会社 橋本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

モーショントロール事業は、売上高が108億円、営業利益が7億円となりました。前年同期比で13億円の増収、3億円の増益。また、5月の予想に対して、売上高は若干の未達であったものの、利益は6.4%増で着地しています。

モーショントロール事業部では、モジュール部門を除く全ての商品群の売上高が、前年同期比でプラスとなっていますが、一部の部材、加工品等の仕入れが間に合わず、受注残は依然として高い水準で、第2四半期末時点の受注残高は約98億円と、過去最高となっています。

営業利益の増減要因としては、材料価格の上昇で約2億円、人件費の増加で約1.5億円、また製造経費と販管費の増加で約2.2億円の減少要因があるものの、売上高の増加による効果が約5.3億円、モーター等の入荷遅れによる仕掛かり在庫の増加が約5.5億円あり、トータルでは、営業利益は、前年同期比74.5%増の約7.5億円となりました。

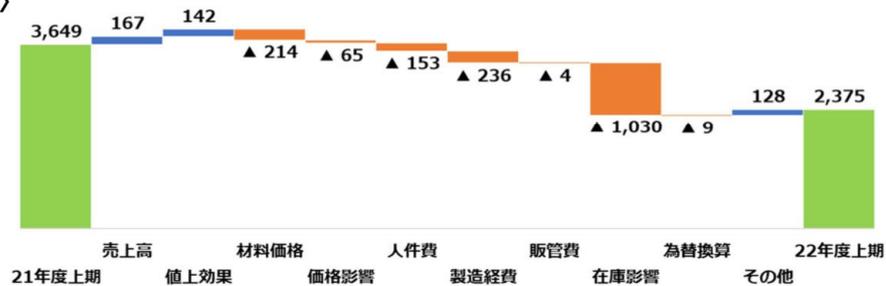
5. 23年3月期2Q比¹⁾- 事業セグメント別業績 〈モビリティ〉 9

※注1：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期	前年同期比	業績予想比	
		第2Q実績	第2Q実績	増減率	予想値 (5/11)	増減率
モビリティ	売上高 ^{※注1}	32,420	36,429	12.4%	38,000	▲4.1%
	営業利益	3,648	2,375	▲34.9%	3,200	▲25.8%
	営業利益率	11.3%	6.5%		8.4%	

〈営業利益の増減要因〉



〈前年同期比〉

- 自動車生産台数の減少、中国の上海ロックダウン影響により苦しい状況ながらも、米州、欧州、韓国は需要改善により増収。利益は原材料価格などコスト上昇により減益。

〈5/11公表予想比〉

- 前年同期比と同じく、自動車生産台数が想定より伸びず減収。コスト高により減益。



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

モビリティ事業は、売上高が364億円、営業利益23億円、前年同期比で40億円の増収となりましたが、利益面では12億円の減益となりました。また、5月の予想に対しても、売上高で4.1%、営業利益で25.8%下振れた結果となっています。

日本では、半導体や部品の供給不足問題に加え、ロシア・ウクライナ問題の影響により、国内カーメーカー各社が減産となるなど、厳しい状況です。またアメリカも同様です。第2四半期は、上海ロックダウンの影響も出ており、グループ全体での売上高は前年同期比プラスとなったものの、業績予想に対してはマイナスとなりました。また、材料価格や人件費の上昇等もあり、固定費の削減に努めたものの、減益となりました。

営業利益の増減要因としては、売上高の増加による効果が約1.6億円、値上げ効果が約1.4億円あるものの、材料価格が約2.1億円、販売価格影響が約0.6億円、人件費が約1.5億円、また、在庫の減少影響が約10.3億円あったことから、営業利益は前年同期より減少し、約24億円となりました。

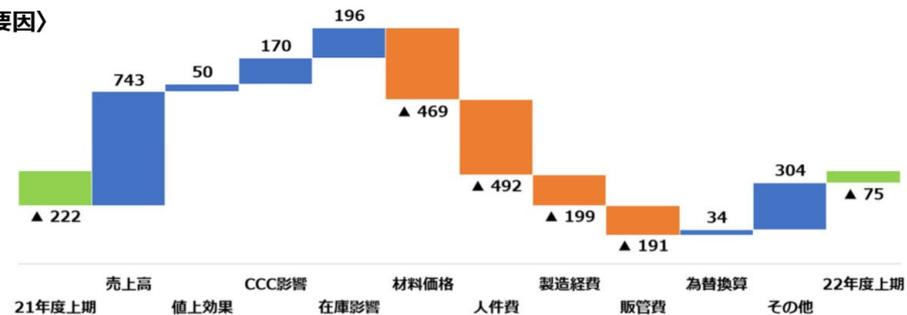
5. 23年3月期2Q比¹⁾- 事業セグメント別業績 (マテハン) 10

※注1：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期	前年同期比	業績予想比	
		第2Q実績	第2Q実績	増減率	予想値 (5/11)	増減率
マテハン	売上高 ^{※注1}	25,334	28,066	10.8%	30,000	▲6.4%
	営業利益	▲221	▲74	—	300	—
	営業利益率	—	—	—	1.0%	—

〈営業利益の増減要因〉



〈前年同期比〉

・日本での物流業界向け、米国での自動車業界向けシステムの減少はあるものの、日本・米州・欧州における金属切り屑搬送・クーラント処理装置の売上増加により増収、損失額は圧縮。

〈5/11公表予想比〉

・日本での物流業界向けの減少等により減収・減益。



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

マテハン事業は、売上高 280 億円になりましたが、残念ながら 7,400 万円の営業損失となりました。前年同期比で 27 億円の増収。また、1 億円の損失の改善とはなりません。しかしながら、5 月の予想に対しては、売上高で 6.4% の下振れ。残念ながら、営業利益も黒字には至りませんでした。

日本国内は、メイフランビジネスの好調により、流通部門や FA 部門の売上減少をカバーし、増収。アメリカでは、セントラル・コンベヤ社が売上減少となりましたが、損失額自体は縮小しております。事業グループトータルでは増収となりましたが、マテハン事業部の利益が減少したことなどにより、米国子会社の営業損失をカバーしきれず、残念ながら、トータルでは損失計上となっております。

営業利益の増減要因としては、材料費の増加で約 4.6 億円、人件費の増加で約 4.9 億円、販管費の増加で約 1.9 億円などの減少要因があるものの、売上高の増加により約 7.4 億円、セントラル・コンベヤの改善影響で約 1.7 億円などにより、トータルでは 7,400 万円の損失となりましたが、損失額は減少しております。

6. 23年3月期 通期業績予想

12

- チェーン事業の好調持続、円安効果はあるものの、コスト上昇圧力も強く、当初予想を据え置き

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期		前期比	
	通期実績	上期実績	下期予想	通期予想	増減率
売上高	215,879	118,933	121,067	240,000	11.2%
営業利益	17,842	8,375	11,625	20,000	12.1%
営業利益率	8.3%	7.0%	9.6%	8.3%	
経常利益	20,045	9,889	10,711	20,600	2.8%
親会社株主に帰属する 当期純利益	14,543	6,756	8,144	14,900	2.5%
1株当たり当期純利益	392.88円	182.49円	220.01円	402.50円	—
(為替レート 1USD)	112.40円	134.04円	140.00円	137.02円	—
(為替レート 1EUR)	130.55円	138.77円	140.00円	139.39円	—
(為替レート 1RMB)	17.04円	18.96円	20.00円	19.54円	—



株式会社 橋本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

続きまして、2023年3月期の連結業績予想です。

連結業績予想ですが、結果といたしまして、売上高、営業利益とも、5月11日に公表した数値を据え置く形といたしました。売上高は、円安効果やチェーン事業の好調が続くと思える反面、足元の受注状況、また、依然として続く部品不足などの不確定要素があることから2,400億円、前期比241億円、率にして11.2%の増収を見込んでおります。

為替につきましては、円安が続くと想定し、下期レート、ドル、ユーロ、人民元とも、円安方向に見直しております。なお、この売上高2,400億円の中に占める為替による影響額は、約190億円と見込んでおります。

営業利益は、材料費をはじめ、各種コストの上昇圧力が高い状況ではありますが、通期で200億円、前期比21億円、率にしますと12.1%の増益としています。また、利益における為替の影響は、約プラスの10億円と見ております。

7. 23年3月期 事業セグメント別業績予想

13

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期		前期比	
		通期実績	上期実績	下期予想	通期予想	増減率
チェーン	売上高 ^{※1}	74,174	43,609	43,891	87,500	18.0%
	営業利益	11,005	6,285	6,715	13,000	18.1%
	営業利益率	14.8%	14.4%	15.3%	14.9%	
モーション コントロール	売上高 ^{※1}	19,906	10,886	10,114	21,000	5.5%
	営業利益	1,129	745	955	1,700	50.6%
	営業利益率	5.7%	6.8%	9.4%	8.1%	
モビリティ	売上高 ^{※1}	66,027	36,429	39,571	76,000	15.1%
	営業利益	6,568	2,375	3,925	6,300	▲4.1%
	営業利益率	9.9%	6.5%	9.9%	8.3%	
マテハン	売上高 ^{※1}	55,728	28,066	29,734	57,800	3.7%
	営業利益	799	▲74	574	500	▲37.4%
	営業利益率	1.4%	—	1.9%	0.9%	
その他 ^{※2}	売上高 ^{※1}	3,074	1,477	1,223	2,700	▲12.2%
	営業利益	▲442	▲265	▲135	▲400	—
	営業利益率	—	—	—	—	

※1：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

※2：「その他」は、報告セグメントではありません。



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

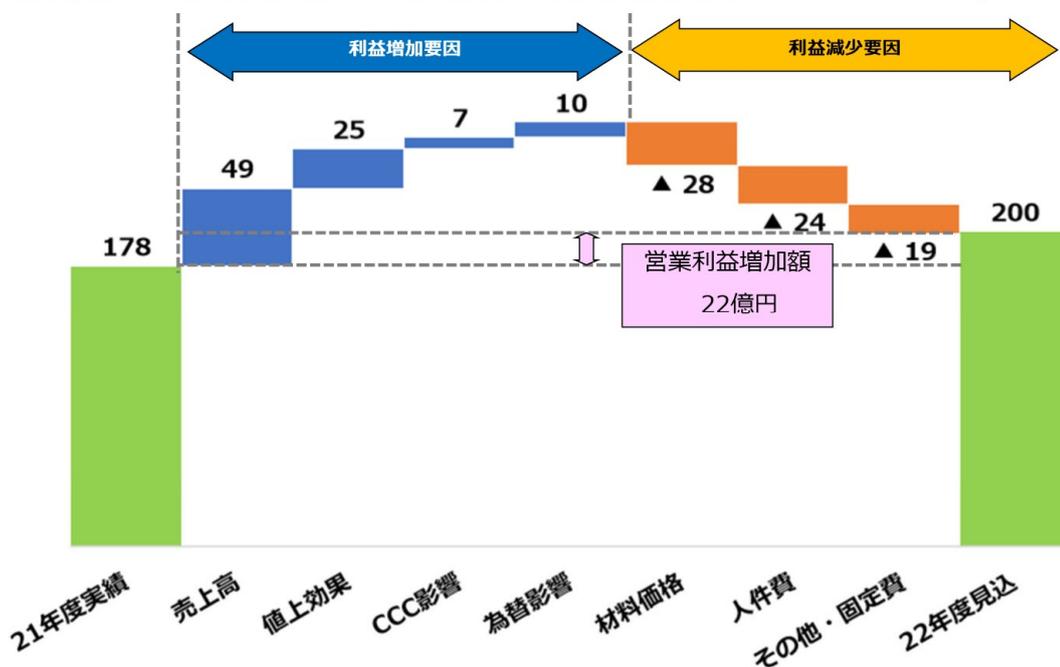
事業セグメント別の予想数値は記載のとおりです。後ほど詳しくご説明いたします。

8. 23年3月期 連結営業利益増減要因分析

14

■ 2022年3月期実績 vs 2023年3月期予想

(単位：億円)



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

営業利益の増減要因分析です。

まずは、増加要因です。売上高の増加に伴う営業利益の増加が約49億円、値上げによる効果が約25億円、セントラル・コンベヤ社の損益改善は約7億円、為替の影響は約10億円と見ております。一方、営業利益の減少要因は、材料費の増加によるものが約28億円、人件費の増加で約24億円、その他・固定費の増加により、約19億円減少と見ております。

9. 23年3月期 事業セグメント別業績予想

〈チェーン〉 15

※注：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期				5/11予想	
		通期実績	上期実績	下期予想	通期予想	前期比	金額	通期予想対比
チェーン	売上高※注1	74,174	43,609	43,891	87,500	18.0%	76,000	15.1%
	営業利益	11,005	6,285	6,715	13,000	18.1%	10,500	23.8%
	営業利益率	14.8%	14.4%	15.3%	14.9%		13.8%	

〈営業利益の増減要因〉



〈前期比〉

- ・下期は需要がやや落ち着くものの、日本、米州を中心に好調を維持。増収増益を見込む。

〈5/11公表予想比〉

- ・各種コストの増加はあるものの、売上増、値上げ効果などにより、売上高、利益とも上方修正。



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

ではここから、事業セグメント別の業績予想についてご説明いたします。

チェーン事業ですが、売上高が875億円、営業利益が130億円とし、5月の公表予想に対し、売上高で15.1%、営業利益で23.8%、上方に修正いたしました。その結果、売上高、営業利益とも、過去最高を更新すると見込んでおります。

営業利益の増減要因としては、材料価格の上昇で約12億円、人件費の増加で約11億円、製造経費の増加で約17億円の利益の減少要因があるものの、売上高の増加で約36億円、値上げの効果で約12億円などにより、営業利益は、前期比18.1%増の130億円を想定しております。

9. 23年3月期 事業セグメント別業績予想

〈MC〉

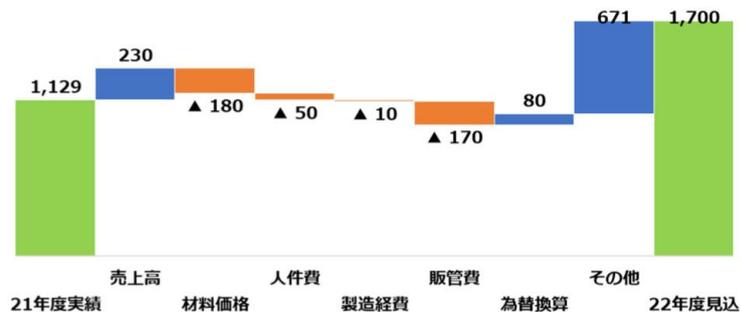
16

※注：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期				5/11予想	
		通期実績	上期実績	下期予想	通期予想	前期比	金額	通期予想対比
モーシオン コントロール	売上高※注1	19,906	10,886	10,114	21,000	5.5%	23,000	▲8.7%
	営業利益	1,129	745	955	1,700	50.6%	2,000	▲15.0%
	営業利益率	5.7%	6.8%	9.4%	8.1%		8.7%	

〈営業利益の増減要因〉



〈前期比〉

- ・ 足元の受注状況等より下期は前年同期比で減収、ただし通期では増収を見込む。利益面でも、生産改善、値上げ効果などにより増益を予想。

〈5/11公表予想比〉

- ・ 下期も部品調達問題が影響を及ぼすと予想し、売上高、利益とも下方修正。



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

モーシオンコントロール事業の通期予想は、売上高が210億円、営業利益が17億円とし、5月の公表予想に対し、売上高で8.7%、営業利益で15%下方に修正いたしました。

営業利益の増減要因としては、材料価格の上昇で約1.8億円、人件費の増加で5,000万円、製造経費、販管費の増加で約1.8億円の利益の減少要因があるものの、売上高の増加で約2.3億円、その他、部品調達問題による仕掛かり在庫の増加が解消しきれないことによる利益の押し上げ効果などにより、営業利益は、前期比では50.6%増の17億円を想定しております。

9. 23年3月期 事業セグメント別業績予想

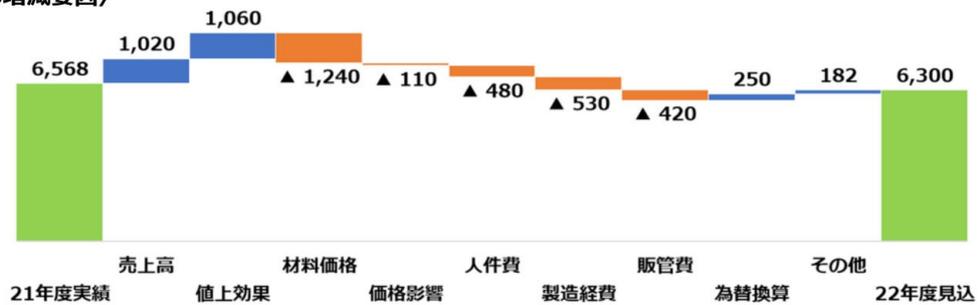
〈モビリティ〉 17

※注：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期				5/11予想	
		通期実績	上期実績	下期予想	通期予想	前期比	金額	通期予想対比
モビリティ	売上高 ^{※注1}	66,027	36,429	39,571	76,000	15.1%	78,000	▲2.6%
	営業利益	6,568	2,375	3,925	6,300	▲4.1%	7,800	▲19.2%
	営業利益率	9.9%	6.5%	9.9%	8.3%		10.0%	

〈営業利益の増減要因〉



〈前期比〉

- ・前期比では、自動車販売台数が増加すると想定。増収を見込む。
鋼材や樹脂、エネルギー価格の上昇を価格転嫁でカバーしきれず、減益を予想。

〈5/11公表予想比〉

- ・上期の自動車生産不振の影響により、売上高をやや下方に修正。
各種コストの増加などの影響が大きく、利益も下方修正。



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

モビリティ事業ですが、通期予想では、売上高が760億円、営業利益63億円とし、5月の公表予想に対し、売上高で2.6%、営業利益で19.2%、それぞれ下方修正いたしました。期初の想定には届きませんが、自動車生産自体は上期を上回ると見ており、また、鋼材等の価格も想定以上でありますが、上期対比で増収となることから、下期の利益率9.9%を目指していきます。

営業利益の増減要因としては、売上高の増加による効果で約10.2億円、値上げ効果で約10.6億円があるものの、材料価格が約12.4億円、販売価格影響により約1.1億円、人件費が約4.8億円、製造経費が約5.3億円、販管費が約4.2億円増加することにより、営業利益は、前期より4.1%減少の約63億円を見込んでおります。

9. 23年3月期 事業セグメント別業績予想 〈マテハン〉

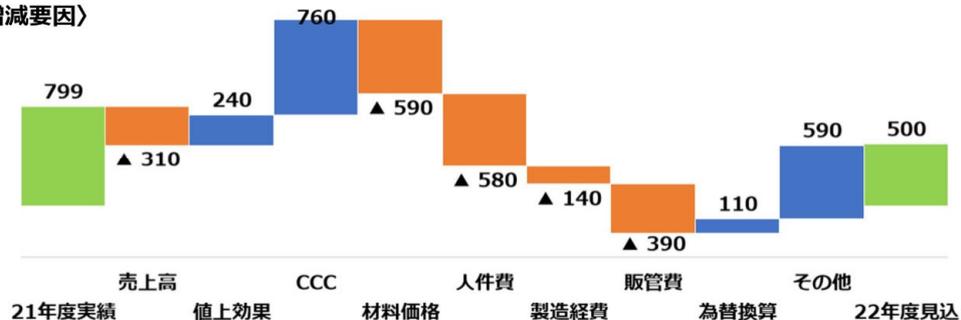
18

※注：売上高の数値には、「セグメント間の内部売上高又は振替高」を含みます。

(単位：百万円)

		2022年3月期	2023年3月期				5/11予想	
		通期実績	上期実績	下期予想	通期予想	前期比	金額	通期予想対比
マテハン	売上高 ^{※注1}	55,728	28,066	29,734	57,800	3.7%	64,000	▲9.7%
	営業利益	799	▲74	574	500	▲37.4%	1,600	▲68.8%
	営業利益率	1.4%	▲0.3%	1.9%	0.9%		2.5%	

〈営業利益の増減要因〉



〈前期比〉

- ・日本および北米での自動車業界向けシステム、日本での物流業界向けシステムの売上減などにより減収減益を見込む。

〈5/11公表予想比〉

- ・今期売上案件の受注状況を鑑み、売上高、営業利益とも下方修正。



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

マテハン事業の業績予想は、売上高が578億円、営業利益が5億円とし、5月の公表予想に対し、売上高で9.7%、営業利益では68.8%、それぞれ下方に修正いたしました。

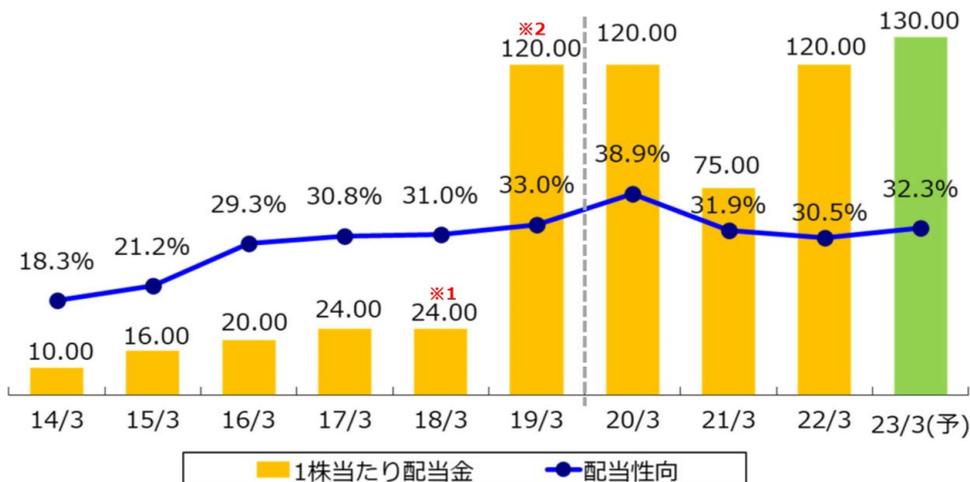
営業利益の増減要因としては、値上げ効果が約2.4億円、セントラル・コンベヤ社の改善影響が、約7.6億円があるものの、売上高の減少により、約3.1億円、材料価格が約5.9億円、人件費が約5.8億円、それぞれ増加することにより、営業利益は、前期より37.4%減少の5億円を見込んでおります。

■ 配当方針

- ・ 連結業績を反映した配当を基本方針とし、連結配当性向30%を基準とした利益配分を目指す。

< 1株当たり配当金、連結配当性向の推移 >

(単位：円)



※1 100周年記念配当「2円」を含む ※2 2018年10月1日付で株式併合(5株→1株)を実施



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

株主還元、配当の推移については記載のとおりです。

今期の配当金につきましては、5月11日の発表からの変更はなく、中間配当金60円、期末配当金70円、合計、1株当たり130円を予定しております。なお、連結での配当性向は32.3%となる予想です。

以上が、中間期の業績報告と今年度の業績予想になります。

◆ 新事業提案コンテスト「T-Startup」を開催



- ① 新たな分野や領域における“新規成長”
- ② 既存分野で“変革成長”



つばき取り組むべき「3つの社会課題」の解決につながる提案を募集



株式会社 橋本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

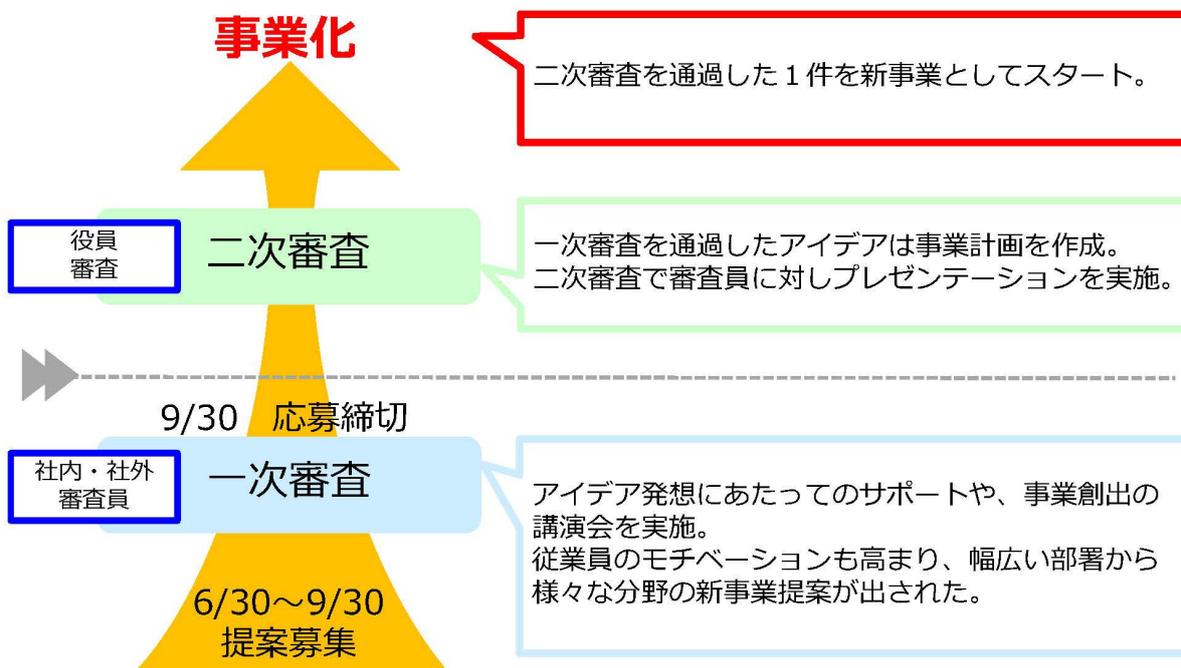
ここからは、現在われわれが取り組んでおります、新商品、新ビジネスを中心としたトピックスをご紹介させていただきたいと思っております。

当社は、昨年度、2021年度から、中期経営計画2025をスタートさせました。ここでは、既存ビジネスの成長、そして既存ビジネスプラスアルファの変革成長、そして、新しいビジネスの新規成長、この三つの部分で成長を目指していこうということで取り組んでおります。

まずはじめにご紹介するのは、T-Startupという社内の社内ベンチャー制度についてのご紹介です。これにつきましては、今年度からスタートいたしました、新事業提案コンテストとしております。社員を対象に、新しいビジネスアイデアをどんどん募集して、希望があれば、その提案者がプロジェクトリーダーとなって、実現まで持っていくということにトライしております。

新たな分野や領域における新規成長、既存分野での変革成長を通して、つばき取り組むべき三つの社会課題、人にやさしい社会の実現、安心・安全な生活基盤の構築、地球にやさしい社会の創造、この分野で社会課題の解決に貢献していきます。

◆ 新事業提案コンテスト「T-Startup」を開催



今年度、6月30日から9月30日までの3カ月間、募集をしましたところ、初めてにしては、合計100件を超える提案を社内から受けることができました。10月には、その100件の中から、1次審査として慎重に審査をし、8件に絞り込みました。現在、その8件のテーマにつきまして、ビジネス化に向けての具体的な方策等、プランニングを深めております。

3月には、二次審査を行い、そこで通過した1件、もしくは2件程度につきましては、来年度から新事業として実現するべく、プロジェクトをスタートしていきたいと考えております。このT-Startupにつきましては、来年度以降も同じようにやっていきたいと考えておまして、椿本チエインの新たなビジネスを、この中から広げていきたいと考えております。

☆ 3事業部 モノづくり無人化PJ

PJ主展開3事業部

- チェーン事業部
Link2025
- モーションコントロール事業
Connect2025
- モビリティ事業部
MAC2025



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

一方、当社はモノづくりの会社です。やはり当社のビジネスの基盤になるのは、現場、中でも製造現場です。そこで、チェーン事業部、モーションコントロール事業部、モビリティ事業部で、2025年をターゲットとした、3事業部のモノづくり無人化プロジェクトをスタートしております。

◆事業部間を超えた「シナジーの創出」へ

【あるべき姿】

- **TSUBAKI-モノづくりDX**へ向けた
《現場革新のデジタル化》
- **Factory-Automation**へ向けた
《自動化・省人化》

～TSUBAKIの発展へ向けた事業部集結による取組み～

PJ主展開3事業部への**ヨコ串支援**

(マテハン事業部、研究開発センターDX技術課、情報システム部)



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

それぞれ扱う商品、製造工程は異なりますが、それぞれの事業部に適したモノづくり、新しい無人化の工場をつくっていかうということで、全社活動でスタートしております。

あるべき姿、TSUBAKI-モノづくりDX、現場各地のデジタル化、Factory-Automation に向けた自動化・省人化を実現すべく、TSUBAKIの発展へ向け、事業部集結により取り組んでおります。

先ほど申しあげましたチェーン事業部、モーションコントロール事業部、そしてモビリティ事業部に加え、マテハン事業部、研究開発センターのDX技術課、そして情報システムがサポートに回って、全社一丸の活動となってやっております。具体的には、現場分析モニタリングのヨコ串導入、組み立ての自動化・省人化構想に必要なツールや、装置の構想の意見交換、各事業部間でのデジタル技術の共有化、全社ヨコ串支援要請として、DXの技術課のデジタル化、エンジニアリング支援、マテハン技術の工場内物流のコーディネート支援といった活動を続けております。

13. 各事業の取り組み（新商品）

25

<p>チェーン事業</p>  <p>世界最小ピッチの動力伝動用チェーン 「RS®ローラチェーン（RS6）」</p>	<p>モビリティ事業</p>  <p>eBike用クラッチ</p>
<p>モーションコントロール事業</p>  <p>DCブラシレスハイポイドモートルと 高度な速度制御を実現する専用ドライバ</p>	<p>マテハン事業</p>  <p>3次元走行台車による自動ピッキングシステム 「T-AstroX（アストロクス）」</p>



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

続きまして、各事業部門の新しい商品、新しい取り組みについてご紹介させていただきます。

まずはじめに、上の左の部分です。チェーン事業部門。この写真で比較していただいたら、少しイメージが湧くかもしれませんが、世界最小ピッチ、1.905 ミリのRS6 番というチェーンを開発いたしました。これは、世界最小のローラチェーンです。

これまで、医療機器やロボットといった部分で、ワイヤーで使われているところを、このチェーンに置き換えて、かみ合いによる確実な運動につなげていくということで、多くの皆様から反響をいただいております。現在、それぞれのお客様と具体的な開発テーマに基づいて打ち合わせを進めております。

上段の右側、これがモビリティです。eBike 用のオリジナル機構のワンウェイクラッチを開発いたしました。世界の eBike の出荷台数は、2025 年には 2,900 万台になると予想されています。われわれが、もともとモーションコントロール事業部で培ってきたクラッチの技術を応用して、世界中の eBike の生産メーカーさんに、われわれのオリジナル機構のワンウェイクラッチを供給し始めました。

下段の左側、モーションコントロール事業では、本年の10月1日、DC ブラシレスモーターを発売いたしました。これは、ローター軸に永久磁石を採用、コンパクトで高効率なモーターになっております。また、専用のドライバーを用意し、優れた速度制御を実現することができ、既に多くのお引き合い、ご注文をいただいております。

下段右側、こちらがマテハン事業部が開発いたしました、T-AstroX でございます。9月に開催されました、国際物流総合展 2022 に出展をいたしました。これは、上下左右に動く3次元の走行台車がピッキングを行う、仕分け機能付きの一時保管システムであります。

従来、外国製の似たような商品はございましたが、純国産での開発は当社が初めて。具体的な機構につきましては、この表ではわかりませんが、複数件の特許を出願し、高速で仕分け能力の高い機構となっております。現在、最後の磨き上げ開発を行っておりますが、e コマースを中心としたお客様から、既に複数の引き合いを多数いただいておりますので、できるだけ早く開発を完了し、市場に投入していきたいと考えております。

超低温保管技術の進化・深化

オートメーション技術の磨き上げ

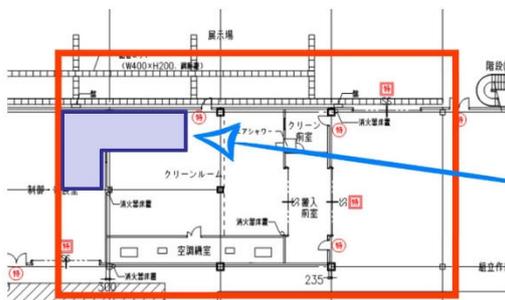
容器のハンドリングからバイオプロセッシングへ

超低温サンプル自動保管システム

PCR自動検査装置

血漿/DNA自動抽出システム

必要なとき・必要なところに再生医療を届けることを目指し、細胞や細胞由来製品の品質を維持するコールドチェーン・オートメーション技術を開発する



- 2021年10月：バイオ専門人材を採用、再生医療PJ発足
 - 2022年12月：埼玉工場クリーンルーム内にラボを設置
- ⇒ **装置・システムのバイオ評価ができる体制を構築**



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

次に、再生医療分野です。

椿本チエインは、マテハン事業におきまして、超低温マイナス 150 度の中で自動ピッキングができる、ラボストッカという商品を今まで発売してきました。今回、その発展として、今、注目されている再生医療分野で、必要なとき、必要なところに、再生医療を届けることを目指すとして、細胞、細胞由来製品の品質の維持をコントロールできる、コールドチェーン・オートメーション技術を開発し、この分野に参入することを決めました。既に大学の先生方、研究機関から複数のテーマをいただき、共同の開発を進めております。

昨年より、この部分での専門の人材を多数採用させていただき、再生医療プロジェクトを発足。本年の12月には、当社の埼玉工場内のクリーンルーム内にラボを設置し、装置、ならびにシステムのバイオ評価ができる体制を構築してまいります。2025年、そして2030年を目指して、再生医療分野で、当社は発展していきたいと考えております。

13. 各事業の取り組み（PCSビジネス）

28

地球にやさしい
社会の創造

通信・制御・見える化技術により、情報とエネルギーを最適に動かすことで、カーボンニュートラル実現に向けた次世代エネルギー・社会システムの構築に貢献。

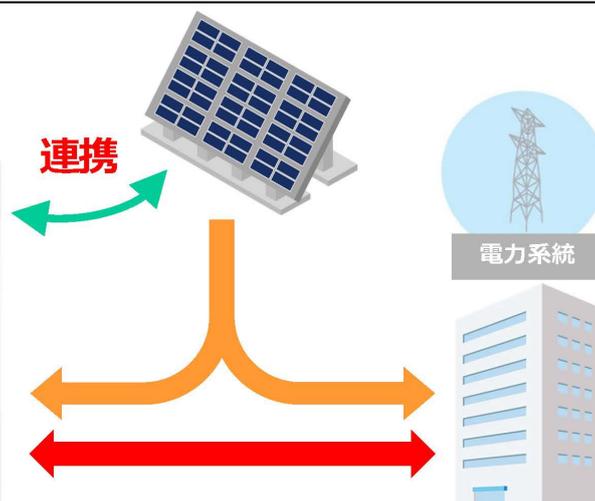
V2X対応充放電装置

eLINK

電動車バッテリー
への充放電が可能



連携



太陽光発電の有効活用



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

次に、PCS ビジネスです。

地球にやさしい社会の創造という社会課題の解決に向けて、通信・制御・見える化技術により、情報とエネルギーを最適に動かすことで、カーボンニュートラル実現に向けた次世代エネルギー、社会システムの構築に貢献することを目指していきます。

当社が開発しています、つばき eLINK は、単に車に充電するだけではなく、車のバッテリーから電気を取り出し、建物へ電力を供給することができる充放電装置です。

また、太陽光発電との組み合わせにより、電動車を蓄電機能として活用することで、電力の安定供給を実現し、カーボンニュートラルの実現に貢献していきたいと考えております。

13. 各事業の取り組み（PCSビジネス）

29



株式会社 椿本チエイン 2023年3月期 第2四半期決算説明資料

当社の eLINK につきましては、交流タイプと直流タイプの両方を持っております。この両方を持っている会社は世の中でも珍しく、これが当社の強みでございます。

われわれは、交流、直流の両面から、お客様への提案、社会に貢献していきたいと考えております。



本資料に記載している事業計画および業績予想等に関する記述は、資料作成時点において当社が入手している情報および合理的であると判断する一定の前提に基づいており、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。実際の業績は、各種要因により、これらの業績予想とは異なる結果になり得ることをご承知おきください。

最後になりますが、こちらが中期経営計画 2025 の考えでございます。

人しやすい社会の実現、安心・安全な生活基盤の構築、地球にやさしい社会の創造といった、社会課題の解決に向けて、椿本チエインは Linked Automation の分野で貢献し、社会の課題解決に貢献していきたいと考えております。

今後とも皆様のご支援、ご鞭撻をお願いいたしまして、私の説明を終わらせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

質疑応答

SMBC 日興証券：笹尾氏 [Q]：SMBC 日興証券の笹尾でございます。いつもお世話になっております。私から3点ほど伺わせていただければと思っております。

1点目は、チェーン状況についてです。下期、少し調整するかなというコメントがあったかと思うんですけども、まだ高水準だと思うのですが、実際、地域別にこういった需要状況かというところをもう少し。また、来期に向けて、少し北米など、利上げとかでリセッション気味な見通しも出てるのかなと思うんですが、リスクなど、認識しておいたほうがいい状況があるのかなど、少し教えていただけますでしょうか。

永井 [A]：それでは、お答えさせていただきます。まず、受注の見通しですが、今年度については、全体の数字として同じ状況が続くんじゃないかなと考えています。ただ、今の状況が、コロナの影響であったり、半導体不足であったり、それから物流問題、インフレ、それからロシア・ウクライナ、いろんな問題が重なっていて、いろんな部門の人間と、実態ですよ、われわれの本当の実力にあった数字がどこにあるのかというところを今、分析しているところです。

それから、地域別の状況をお話しますと、日本については、半導体、二次電池、工作機械、食品、鉄鋼、物流、立体駐車場ということで、さまざまな分野で好調が続いてると。それから、北米については、特にわれわれの競合である相手先が、非常に供給問題が生じているところのものが転注されてきているところも含めて、非常にたくさんの注文をいただいていると考えています。それから欧州に関しては、ロシア・ウクライナ向けの注文というのは、ほぼゼロになっている状況ですけども、全体としては目標を達成している。

それから、環インド洋については、コロナ禍の中で、さまざまな活動ができずにいましたが、市場が回復して、その影響で非常に好調になっているというところです。韓国についても、半導体、建機、食品、IT 関連が好調で、ほぼ前年並みの受注が続いている。ただ、中国については、コロナのロックダウンで、われわれもそうなのですが、さまざまな営業活動ができていない状況で、数字については、非常に低い状況になっているというところです。

ただ、来年度の上期について、この数字が続くのかというところに関しては、先ほどもお話ししたように、もう一度、われわれの実力の実態がどこにあるのかというところを分析して、来年度の計画に反映したいと考えています。以上です。

笹尾氏 [Q]：1点、補足いただければと思うのですが。その北米の競合が厳しいところからの転注という話がまだ続いているということで教えていただいたのですが、これは結構、前から伺っていた話かなというところで、そろそろなくなるかなという話も聞いていたような記憶があるのですけれども。まだその効果というか、競合の厳しい状況は続いているという認識をされていていいのでしょうか。

永井 [A]：続いていると認識しています。そこへ発注したユーザーからの話で、あと1年ぐらい続くんじゃないかという話もありますので、当然われわれとしたら、われわれに転注していただいたユーザーさんに、改めてわれわれの良さを知っていただいて、継続的な受注となるように、これから活動していきたいと考えています。

笹尾氏 [Q]：ありがとうございます。マテハンについて伺いたいのですけれども。

売上高の見通しを引き下げた、ボリュームのところを引き下げている要因と、あとセントラル・コンベヤ社の増益要因のところも、期初に見ていたところより縮んでいると思うのですけれども、そちらの二つを、マテハンで教えていただけますでしょうか。

岡本 [A]：それでは私から、ただいまのご質問についてお答えいたします。まず、売上高のほうですけれども、流通関係の売上が、やはりちょっと伸び悩んだところがございます。

世の中は、EC、通販関係の物流センターとかが非常に多くございまして、われわれもその分、引き合いもいろいろいただいているのですが、今年度に関していうと、半導体不足とか、そういった資材の納入が遅れたりなんかして、そういったことで期ずれを起こしたりしてございまして、そういう意味で当初予想していたよりも、かなり後ろのほうに売上が外へずれていったということも一つの要因ではございます。

それとあと、全般的にそういう傾向が、それ以外の業界にもありまして、注残はそんな、さほど減らないのですが、売上のほうはずれていく、そのようなちょっとおかしい現象にはなっているのが実態でございます。引き合いは堅調ですので、そういう意味では、今後その辺のところを修正しながら、運営していきたいと考えております。

それから、セントラル・コンベヤの話なのですけれども、セントラル・コンベヤのほうも、大型のプロジェクト案件、手こずっていた案件がございまして、それに関しては、ようやく全て終わって、検収が上がったという状況でございます。

したがいまして、その部分に関しては、心配はないのですけれども、ただその間、受注活動といえますか、できるだけその案件に集中するようという指示を出していたものもございまして、引き

合い等の活動が滞っていたこともありまして、今年度、その辺のところのバランスが崩れているところもあって、セントラル・コンベヤ自体の売上というのも、非常に減少しているのが実情です。

ただ、ここも引き合い関係を、ようやく増えてきたところもございまして、この辺も CCC と、われわれ日本サイドとも、いろいろやりとりをしながら、こういった売上不足に関してのサポートというのも今やっているところでございます。以上、お答えいたしました。

笹尾氏 [Q]：ありがとうございます。つばきのモノづくり改革というところで、25年までのロードマップを見せていただいたかと思うのですが、こういったいろいろな取り組みをされる上で、設備投資、IT系の投資ですとか、今後、数年間、どのような水準になるのかなというところを教えていただければと思うのですが。それほど増えないのか、少し増やしていくのか、もしビジョンがあれば教えていただけますでしょうか。

明坂 [A]：それでは、明坂からお答えいたします。当社の場合、2017年ぐらいから21年ぐらいまで、特にモビリティ事業で先行投資をかなり行ってきました。その頃、連結でいうと、年間、150億前後ぐらいの設備投資を行いました。そういった特殊要因がなければ、現在の既存事業における設備投資は、大体、年間110億から120億ぐらいと見ています。

今のITですか、モノづくりの進化に関する投資なのですが、これは既存とは別枠で考えております。今年度、それから多分、来年度も同じぐらいになると思うのですが、既存事業の更新メンテナンス等々に関しましては、同じような110億円前後ぐらい。それに別枠で、モノづくり、それから新事業開発等の設備投資は上乗せしていくことにしています。

まだモノづくりのほうでは、そんなに巨額なDX系で投資は、今のところ、それに向けての開発等を進めている段階ですから、あんまり額としてはまだ出ていません。今後、出てくると思っています。以上です。

笹尾氏：ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。ではここで、事前にメールで頂戴したご質問一つでございますので、ご紹介させていただきます。モビリティ事業に関するご質問です。

為替を除くと、売上高が伸び悩んでいるように見えますが、それは半導体や部品不足の影響による自動車生産の減少だけが原因でしょうか。想定以上に電気自動車、EVが伸長しているということはないでしょうかというご質問です。こちら、モビリティ事業統括、佐藤上席執行役員、お願いいたします。

佐藤 [A]：それでは、佐藤からご回答をいたします。今現状、やはり半導体がまだ問題を起こしていることと、それから日系になりますけれども、グローバル調達を行っているメーカーさんが非常に苦しんでいるのが今の状態でございます。実際のところ、各市場を見ても、在庫がない、車の在庫がない状況で、カーメーカーさんとしては、作って売りたいという意思があるのですが、やはり部品の不足で、こういった状況に陥っているのが現状でございます。ですから、EVが伸長しているというのは、まだ見えてきてないと。

ただ一方で、私のほうも中国に出張できておりませんので、中国市場が実際にどんなものか、街で走っている車はどういったものか、確認できておりませんので、中国だけについては申し上げることはできませんけど、ほかの市場では、やはり半導体、部品不足が大きな要因になっています。

ただ一方で、ここに来てようやく、市場によっては明るい兆しも見えてるということで。まず北米のほうは、ここに来てようやく、昨年度並み以上の車の生産が行えるようになってきた。それから、アジアにおきましては、どちらかという半導体を使ってない、使っていないという言い方はおかしいですね。少ない車が多いものですから、そういった意味で、アジアは非常に回復してきているということで。市場によっては、まちまちですけれども、今後、今までのような、半導体がないから、部品がないから車が作れないということは解消していくかなと見ております。以上でございます。

司会：予定時刻の少し前ですが、質問も出尽くしたようですので、質疑応答を終了させていただきます。

なお、本日の内容は、質疑応答を含め、当社ホームページ等にスクリプトを掲載いたしますので、ぜひご活用ください。

それでは、椿本チェイン、第2四半期決算説明会を終了いたします。本日はありがとうございました。

[了]